

第十二回 島清ジュニア文芸賞 受賞作品

『優秀賞』

【中学生小説の部】

気が付けばそこにあるもの。

美川中学校 三年 松中 悠

去年の夏も暑かった。

いつも通り、この町一番の高台にある給水塔の下で遊ぶことを決めた

俺たちは、自転車で緩やかな坂道を上っていた。例年以上と言われる気

温の中、俺はその胸と顔に、溢れんばかりの期待を滲ませながら、ペダルを回していたんだ。

夏休み前日の朝、俺は急いで自分の教室に向かっていた。先生とすれ違うたびに「西川さんっ！」と大声で注意を受けたりしたが、気にしている余裕は、生憎持ち合わせていなかった。

六年一組の扉を勢いよく開ける。

ガラガラガラッ!

「おわっ、何だ優成か。おはよ。今日は早いな」

「ふわあー、おはよう優成」

「はよう。本当だね、まだ八時前だよ。どうしたの」

教室には、大親友であり悪友の三人がいた。ビククリした顔をしている日野陸と、あくびをして涙目の岩田勉。そして、今この教室内で紅一点の柴井美由だ。

「そうだ優成。明日の十時から、いつもの五人で遊ばないかって、今話し」

「三人とも、今朝の新聞読んだか！」

陸の台詞を途中で遮りながらもたずねる。

「見たの、見てないのっ」

俺の剣幕に圧倒されつつ、三人は同時に首を横に振る。

何で見てないんだようと思いつつ、新聞の切り抜きを、三人の集まっている陸の机の上に置いた。

「ほら、この記事。朝読んでびっくりした」

『給水塔解体計画』

見出しを見た瞬間、三人は口々に文句を言い出した。

「給水塔の解体だあ？」

「何これえ。もう決定なのお？」

「取り壊すって……あそこは私たちの遊び場なのに」

陸にいたっては、怒りにまかせてこのまま新聞を引きちぎってしまいたいそうさ。自分自身、読んだ当初はかなり動揺していたから、他人のことは言えないが……。

「でもこれ、かなり前からあったらしいよ。それを先延ばしにしていた

「だけなんだって」

俺より先に読んでいたらしい父さんが、そんなこと言っていたような気がする。

もともと結構古く、使っていないなかった給水塔は、三月に起こった地震後、間もなく行われた調査に引つかかってしまったのだ。そこが、今回取り壊される最大の原因となったのだろう。

それに加え、今まで、これからの維持費や、十二月になると設置されるイルミネーションの電気代など、役所側としても大変手のかかるものだったに違いない。

だが、そんな細々とした大人の事情など、俺たちにとって、関係のないこと。ただこれからも、あそこで遊んだり、待ち合わせをしたり出来ればそれでいいんだ。

「そういえば、と思い出したように陸が言う。」

「去年、給水塔の裏にある林に秘密基地作らなかったっけ」

「そうだ、作った。みんなで汗だくになりながら、納得のいくまで頑張ったのを憶えている。」

「そこでやっと、俺は本題を切り出すことにした。」

「今朝、姉ちゃんにも訊いたんだけど、みんなはこれについてどう思う」

突然訊かれた三人は顔を見合わせ「どういうこと？」と返す。

「つまり、給水塔解体に、みんなは賛成・反対のどっち側ってこと」

『反対!』

「!!!」

三人の——いや、後から話を聞いていた、他のクラスメイト達の声が重なった。

「じゃあ、具体的にどうするかを決めていこうよ!」

「おおお!」

驚く俺をのぞき、話はどんどん進んでいく。

実際、俺の思っていた以上の反応だった。

それほど俺たちにとって、給水塔は大きな存在なんだろうな。

そこで、朝自習を知らせるチャイムが鳴る。

結局、いつもの五人で集まって考えることになった。

「なんだって、今日の午後から授業がないんだからっ。」

俺たちを、小学生最後の夏休みが「ウェルカム」と、とてもとても楽しそうに迎え入れようとしていた。

午後一時。終業式を終えて家へ帰り、お昼を食べて急ぎ急ぎ来た給水塔下。

「まだ誰もきてないな、早すぎたか。」

町の中で一番の高台にある給水塔には、自分一人と、初夏の日差しに照らされた青く生い茂る林しかなかった。

「おおい、誰もいないのかあ」

「……返ってくるのはミンミンゼミの声と、近くを通っている小川の流れる音だけ。」

「——暑いなあ」

乗ってきたマウンテンバイクを手で押しながら、てくてくと日陰を探す。すると……

「ちよつとそこの君!」

「……ん?」

一応周りを確認してみる。

「だから、君だよ。マウンテンバイクの子!」

後ろを振り向くと、そこには作業着を着たおじさんが立っていた(こ丁寧にも、この暑い中、長袖長ズボンにヘルメットという格好だ!見ているこつちが暑くなる)。

おじさんが、俺に向かつてクリップボードを差し出す。そこには、一枚のプリントがはさまれていた。

「なんですか、これ。工事のお知らせ？」

「そうだよ、とおじさん。」

「もしかしなくても、給水塔解体のだよね」

「これまたそうだよ、とおじさん。」

「それにね。この給水塔は、ずっと昔に建てられたものだから、いつ壊れてしまうか分からなくて。だから解体が決定したんだよ。」

「……………へえ」

その後も、何だかんだでこの給水塔は取り壊さなければならぬと、熱弁を奮うおじさん。なかなか、しつこい。

「すいません。いろいろと聴かせてもらってなんですが、このアンケートには答えられません」

「え？」

意気揚々と話していたおじさんは、目を丸くする。そして、少し残念そうな顔になった。

だが、ここで引くわけにはいかない。少しでも、俺たちの意見を知ってもらわないといけないからだ。

「俺……僕たちは、この解体工事に反対です！」

俺はそれだけ言うと、マウンテンバイクにまたがり、ペダルに乗せた足に力を込める。

「ちよつと待ってよ、ねえ君！」

男の叫ぶ声を遠く後ろで聞きながら、俺はなだらかな坂を猛スピードで下って行った。

「それでどうするんだ？」

あのあと、五分も経たずして陸、勉、美由、と合流することが出来た

俺は、さっきのことを話した。

「別にどうもしないよ。これから、俺たちに出来る事をするだけさ」

「ああ、そうだな……」

——東の間の静寂が訪れた。俺たちは数秒、周りにある自然の音に耳を傾けていた。

蟬の音が、水の音が、普段は気にしていない者たちの声が、やけに大きく耳に……心に響いてくる。

(いつも当たり前前にある物こそ、見落としやすい、て事かなあ)

これに、この給水塔は当てはまるんだろうか……。

「オイ！その小学生っ」

『うわわあああああつっ』

今までないほどの綺麗なハモリが、真昼の給水塔広場に良く響いた。それはもう、良く響いたものだ。

「姉ちゃん！驚かささないでくれよ」

俺たちの後ろには〈仁王立ちをしている女子中学生〉が立っていた。彼女は俺の姉の歩だ。容姿は綺麗な方、なんだが……。

「西川歩サマのおとおりのいい！」

性格に、少し難ありな人だ。おまけに、頭がいいと言うかズル賢いと言うか。

「よ、優成。うまくやっているか？」

「……今からだよ。」

いまから？と俺たち姉弟以外のメンツは首を傾げる。

「ああ、今からは作戦タイムだ」

これを見てくれ、と俺は一冊のノートを取り出す。ばらばらばらばら。

「……これって、署名運動？」

いち早く俺たちの意図を読み取った美由が、ノートに書かれた文字を読みながら問う。

それに答えるのは、姉ちゃんだ。

「おつ、さすがは美由。飲み込みがはやいな」

褒めてもらって嬉しいのか、美由の鼻の穴がわずかに膨らむ。癖なのだろう。

「これはな、アタシが昨日から走り回った、努力の結晶なんだ。知り合  
いという知り合い全てに書いてもらって来たんだぞ」

どうだと言わんばかりに胸を張る姉をスルーしながら、俺は作戦に  
ついて説明を始める。

「明後日の日曜日から、人の集まりやすい場所を中心に活動しようと考  
えている。日曜日、用事のある人はいる？」

「私は大丈夫。その作戦に賛成！」

美由がいち早く同意する。

「日曜日かあ、やつぱり駅とか商店街がいいよねえ」

勉強も、彼なりの同意を示してくれる。

「よっしゃあ！これで決まりだあ。作戦開始は明後日の日曜日、場所は  
商店街通りから駅までの範囲ってわけだな！」

陸に限っては、聞かなくても分かっていた。

「もちろん、アタシと優成も一緒だからな」

姉ちゃんも手伝ってくれるらしい。

「アタシもこの給水塔には、たくさんの思い出がつまってるんだ」

まだ、たった十五年しか生きていない子どもが、いったい何を言っ  
てるんだ——

大抵の大人なら、そう一蹴いっしょくしてしまうような一言か  
もしれない。でも、俺たち子供にとつてその言葉は、この給水塔解体に

反対する『根源』と言っても過言ではない存在だった。

勉強が、ポツリと言う。

「僕達は、たくさんの思いを守っていかなきゃいけない。これからも、

ずっと……」

……そうだな。

俺たちの真上にあつたはずの太陽は、西の空に少し傾き始めてい  
た。

そして、約束の日曜日。

五人でそれぞれ、クラスメイトに連絡をとった結果、集まったのは総  
勢三十人！

「いっぱい集まったな！」

朝の賑やかな商店街に、いつもとは違うざわめきが生まれていた。

「みんな！打ち合わせ通り、自分の配置についてね！」

「はあぁーい！」

実は、数人の保護者も同伴。そこだけは、先生が許してくれなかつた  
んだ……。

『給水塔解体反対運動の署名、お願いします！』

通勤中のサラリーマンや、学生に何度も声をかける。そして、数時間  
が経つと分かってくるものもある。

「あの人、ただの子ども好きだよ」

「親切なのはいいんだけど……ねえ」

まあ、小学生がやっているからしようがないっちゃしようがないけれ  
ど……。

そんなこんなで、気が付けば夕方。

みんなもうぐったり。体力的にもそうだけど、精神面にもかなりのダ  
メージが……。

「集計できたわよー！」

保護者の方々が、がんばって集計してくれたようで（疲れてそれどころ  
ではない）。

「三百枚以上はあるよ！」

「やつ、やったああ！」

みんなが思っていた以上に、たくさんの署名が集まった。これを聞くと、俺たちの苦労も報われるってものだ。

「今日は、ありがとうございました！ご苦労さまでした！また次回もよろしく願います」

『ご苦労様でした！』

この日はこれで解散。俺たちはそれぞれの家の方向へと散って行く。こんな感じに、俺達は一人ひとりがんばって、さらにたくさんの署名を集めた。たまに、心から給水塔を守りたいと思っていてくれる人と出会う。その度に、この署名活動の意味を——「みんなの思いを守る」と言った時の思いを再確認する。

そして今日も、百枚近い署名集めた俺達は、それぞれの帰途へと就こうとしていた。

「おおい、優成い」

「何、勉？」

勉が俺の方へ走ってくる。

「僕、思ったんだけど、次するときにはさ、おじいちゃんおばあちゃんの家を回ってみても、いいんじゃないかな？」

正直、これは盲点だった。

「……そうだな」

——じゃあねえと行って、勉は家へ帰って行った。

俺は、家へ帰ってからこれについて考えていた。やっぱり効果的なところで、紙とペンを用意する。

(よし、準備バンタン)

俺は、今年はお年寄りの意見も聞きたい。俺たちと同じ思いを持っているかもしれない。もしかしたら、もっと強く思ってくれているかもしれない……等々、思っていることを書き出してみた。そしてそれをまとめて、数枚の手紙にする。

これでいいんだ。明日、勉に渡そう。

その日の夜は、ぐっすりと眠ることが出来た。

「こんにちは」

その日、俺と勉は給水塔の近所のある駄菓子屋さんへ足を運んでいた。「あら、いらっしやい」

柔和な笑みで迎えてくれたのは、店主のキヨおばあちゃんだ。

二人でアイスを買うと、いつも大変だねえと言って、代金をおまけしてくれた。

勉が訊く。

「おばあちゃんは、給水塔が壊されてしまっても平気なお？」

「えっ？」

「僕たちはねえ、あの真っ白い塔の中に、たつつくさんの思い出が詰まって、だからそれを壊させないように、署名を集めているの」

「そうなの……」

そう言ったつきり、おばあちゃんは黙ってしまった。俺たち二人も、黙々とアイスを食べ続ける。すると、おばあちゃんが先に口を開いた。

「寂しくないわけじゃないの」

それは、本当に……心からそう言っているのだと、すぐに分かった。

「私の子どもの頃からあるのよ、あの給水塔」

(すぐく古いんだ……あの給水塔)

「だからね、私にとってあの給水塔は、『あって当たり前存在』なのよ」  
俺と勉は、おばあちゃんの言葉に衝撃を受けた。

「……あって当たり前存在？」

「そうよ、とおばあちゃん。」

「今まで傍そばにあったものが、いきなり無くなっちゃうんですもの。寂し

いわ」

「……その思いは、おばあちゃんだけのものじゃないよ。僕たちも、一緒だよ」

勉が、キヨおばあちゃんの手をそっと自分の手で包み込む。

「私だけではないはずよ。そこのおじいちゃんも、商店街の八百屋さんとかも、みんな本当は寂しいって言っていたわ」

やっぱり、そうだったんだ。

おばあちゃんは、ありがとうと言ってグミをお土産にくれた。

夏休みも、残り二週間をきった。

みんなで集めた署名は、保護者によって役所に提出された。

そしてやっと、その日がやってきた。

受付からではなく、わざわざ村長さん直々に答えてくれるらしい。

『それではいままら、給水塔の解体作業反対運動に、お答えしていきたくと思います。』

開会の後にも、いろんな人がスピーチしていて、正直に言うとは屈だった。でも、その中には給水塔が町のシンボルであることや、子どもの時に遊んだ話も混ざっていて、給水塔が歩んできた歴史の長さに圧倒されながらも、村長からの返答を待った。

実際、俺達は不安で押しつぶされそうになっていた。自分の心臓の音が、周りの人に聞こえてはいないだろうか。今、変な顔をしていないだろうか。そして、給水塔はどうなってしまうのか………。

『村長、お願いします』

ついにきた。子どもたちだけでなく、保護者までもが表情を硬くする。バクバクと心臓の音が、いつもより大きく聞こえる。

「今回の給水塔解体計画は………」

俺は、ぎゅっと手を握り締める。

(俺たちにやれることは、全てやったんだ)

「……そのまま、続行することに決定しました」

——あつ。

会場が、ざわつく。

子供達の姿をみていただろう！

ちゃんと考えたのか、ええっ！

役所側に向かって、ヤジが飛ぶ。

役所も負けじと、理由を説明し続ける。が、ヤジがうるさすぎて良く聞こえない。

俺たちは………どうしていいのか、よく分からなかった。

怒ればいいのか、泣けばいいのか。それとも笑ってしまえばいいのか？

「ただしっつ！」

村長が、会場全体に聞こえたであろう大声をだした。これには、会場もいったん静かになる。

「コホンツ……この活動を積極的に行ってくれた小学生のみんなには、賞状を贈呈したい。そして、給水塔を取り壊す前に一度、記念写真を撮りたいと思う」

「記念写真？」

誰かが口をひらいた。

「そう。解体してしまう前に、その形を記録に残しておきたいんです。ちなみにその写真は、役所側で大切に保管させてもらいます」

またもや、会場が静まり返る。これは、耐え難い静寂だった。だからなのかは分からないが、俺が一番に口を開いた。

「みんなで記念写真撮ろうぜ、なあ！」

「……優成」

「取り壊されるのは、しょうがない。さっき説明受けた通りだし……そりゃあ、悔しいよ、本当は壊したくなくて」

「優成っ」

「こわし：ひっ、たくなんて：な：いん：だあああ」

姉ちゃんが、俺のことを強く抱きしめてくれた。泣きたくなんかないのに、頬を、次から次へと涙が流れてくる。

「そうだね、写真撮ろうよ。みんなでさ」

「俺も悔しい。とつても悔しい！けど、しょうがないから、写真で許してやる！」

「記念写真、撮ろうよう！」

「私だつて、壊してほしくなんか、ない：のに、さ。でも、みんなと：一緒に：ひっく写真、撮りたいな：ひっく」

子どもたちはみな、写真を撮りたいとせがんだ。

「写真、撮ってもらったらどうですか」

「キヨおばあちゃん！」

俺は顔を上げると、キヨおばあちゃんに視線を向ける。おばあちゃんは、少し悲しそうだけど、優しく、いつも通り微笑んでくれた。

「悔しいのは、ここにいる誰も彼も一緒のこと。そんな中、子どもたちは写真を撮ろうと、写真を撮りたいって言えるんです」

保護者や、周囲の人たちの空気が変わってきたのを感じた。

俺も、泣いている場合じゃないな。

目元にたまっている涙を、手でこしこしと拭う。目が赤く腫れるなんて、しつたこつちやない。

「みんな！給水塔は、取り壊されてしまうかもしれない。今まであったあたりまえが、無くなってしまうかもしれない！けれど、違うんだっ」

「……なにが違うんだい？」

村長さんが訊いてくる。その眼には、何かを期待しているかのような

光が垣間見えた。

「建物がなくなっても、そこで遊んだ時間はなくなるらない。そこで感じた事も全部本物のまま、大切な記憶として残り続けるんだ！」

「そうだそうだー！と、他の子どもたちがあおり始める。

「でもまだ今、給水塔は、そこにある。だから、なくなってしまう前に、形に残しておきたいんだ！」

「ここまできると、この会場で、俺が何を言いたいか分からない者ははいないだろう。」

「準備はいいかい？」

『はあああ！』

「これまた綺麗なハモリだ(笑)。」

この町一番の高台には、オレンジ色に変わった太陽の斜光に照らし出された給水塔と、それを囲むようにして立っているこの町の人々が、いる。

一眼レフカメラを手に持った役所の人が、俺達に向けて合図を送る。

「いくよー。ハイツ、チーズ！」

俺はちゃんと笑えただろうか？

みんなはちゃんと笑えただろうか？

ああ、そういえば……

「……新しい基地をさがさなきゃだな」

『カシヤツ』

## 《選評》

街のシンボリックな古い建物の取り壊しに対する子どもたちの思いや、それを取り巻く大人たちの様子、緊張感が情感豊かに描かれています。

物語の最後の風景と、主人公のまっすぐな心が非常に印象的で、全体がきれいに整った作品です。